

京都大学	博士(文学)	氏名	横内吾郎
論文題目	ウマイヤ朝後期のカリフ権の研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>ウマイヤ朝(661-750年)は、イスラーム教の預言者ムハンマドが没して僅か30年後に誕生した、イスラーム史上最初の世襲王朝であり、その支配時代は、イスラーム文明が形成途上にあつた非常に重要な時代の約100年を占めている。</p> <p>ウマイヤ朝史を研究するために我々が利用できるムスリムの著作は、その尽くがウマイヤ朝の滅亡後に収集、編纂されたものであり、同時代史料ではない。またこれらの著作は、史料間での矛盾や不一致が散見されるなど、少なからざる問題を抱えている。しかしながら、これらの著作には、より古い時代からの多数の伝承が保存されているため、慎重な史料批判によって、これらの伝承からウマイヤ朝史の再構築が可能であると、かつては考えられていた。しかし、近年の研究の結果、多くの伝承が様々な定型表現を駆使して構成されていることが証明され、ある伝承から抽出可能な史実が、かつて考えられていた以上に限定されることが明らかとなった。一方で、伝承における後世の学者の意見の反映についても盛んに論じられており、もはやムスリムの伝承から得られる情報にのみ依拠して、ウマイヤ朝史の全貌を明らかにすることは、ほとんど不可能となった。</p> <p>こうした研究の潮流の中で、近年ではムスリムの著作だけではなく、貨幣、碑文、パピルス文書といった同時代史料や、キリスト教徒の著作、従来軽視されてきたムスリムの詩文などを複合的に活用する研究が盛んになってきている。こうした新しい手法による研究の成果として、ウマイヤ朝時代の諸相について、従来のムスリムの伝承を中心にして形成されてきたものと異なる像が描かれ始めている。ウマイヤ朝のカリフを例に言えば、概して宗教には無関心な世俗のカリフとして描かれていたが、特にウマイヤ朝後期のカリフが、宗教へ積極的に関与し、支配の正統性を訴える手段に宗教を利用していたことが明らかとなってきている。カリフは、多数派であるスンナ派にとって預言者ムハンマド死後の最高指導者であり、カリフ(=イマーム)論はムスリムの政治思想の中核の問題である。それゆえに、ウマイヤ朝期のカリフ像が改められ、カリフ制あるいはカリフ権のあり方の変遷についての理解が修正されることは、その後のカリフ論や政治思想の展開を正しく理解するためにも非常に重要である。こうした目的意識のもとに、本論文ではウマイヤ朝後期のカリフ権に焦点を当てて議論を進めていく。</p> <p>本論文では、ウマイヤ朝後期のカリフ権について分析を進める手段として、P. Croneが1980年に『馬上の奴隷(Slaves on horses)』において提唱した、プロソポグラフィ</p>			

研究を利用する。この研究手法は、個人の経歴を調査して、ある集団の相互関係や行動を解明するというものである。ムスリムの史料に表れる総督などの人名は、その他の同時代史料によって概ね裏付けを得ることができ、経歴（職歴や婚姻関係など）に関する情報については高い信頼が置けるため、プロソポグラフィ研究がムスリムの史料の有効な活用法となる。本論文では、具体的には、ウマイヤ朝後期のカリフの人事を詳細に検討し、カリフの親族の登用のあり方や特定の地方の人事に見られる特徴を分析していく。

第1章は、ウマイヤ朝後期におけるカリフの親族の登用の傾向と、ワリー・アルアフド(カリフ位継承者)の問題について論じたものである。カリフ＝ヤズィード1世の死後、第2次内乱(683-692年)が勃発すると、ウマイヤ朝はシリアの一部の勢力によって支持されるのみとなった。こうした状況のもと、メディナからシリアへ到来し、カリフに即位したマルワーン1世とその息子アブド・アルマリクは、従来からのウマイヤ朝の支持勢力の力を借りつつも、自らの親族を軍事遠征の司令官や地方総督に重用した。特に、アブド・アルマリクは、兄弟など近しい親族ばかりでなく、様々な支族のウマイヤ家の成員を登用している。また婚姻関係を結んで親族に取り込んだ人物の登用も確認され、特に地方総督については、ほぼ親族で占められている。内乱期の乏しい戦力の中でカリフの座につき、また旧来のシリアの人間ではなかったマルワーン1世、アブド・アルマリク父子には、独自の信頼できる人材が不足しており、親族の力に依存せざるを得なかった。

次代のワリード1世の治世以降、全体的な傾向としては、カリフの親族が総督として登用される機会は失われていく。こうした状況の中で、シリアからアルメニアにかけての国境地帯の総督、メディナの総督、ビザンツ遠征の司令官には、王朝末期まで親族の重用傾向が継続して確認される。特に国境地帯の総督、ビザンツ遠征の司令官には、母親がウンム・ワラド(非アラブの女奴隷)である、純血のアラブではないマルワーン家(マルワーン1世の子孫)の王子が重用されている。

一方、歴代のカリフやワリー・アルアフドについて調べると、王朝末期まで、その全員がアラブの母親をもつ純血のアラブであり、そうした血筋の人物のみがカリフの候補足りえたことが判明する。母親がウンム・ワラドである王子が重用されたのは、彼らが歴代のカリフにとってカリフ位を争うライバルとはならず、カリフは彼らを身近な信頼できる駒として重用し、軍事力を委ねるとともに、ライバルとなるその他の純血のアラブの王子を軍事力から遠ざけて、権力の維持を図った。

しかし、王朝末期、カリフ＝ワリード2世がウンム・ワラドを母にもつ息子のハカムをワリー・アルアフドとすると、その血統ゆえにカリフ位から遠ざけられていたヤズィード3世、次いでマルワーン2世がカリフ位を篡奪し、これら一連の内乱(第3次内乱、744-747年)で消耗したウマイヤ朝は、引き続いて発生したアッバース朝革命によって滅亡することとなった。続くアッバース朝では、ウンム・ワラドを母にもつカリフが

一般化しており、カリフ＝ワリード2世の後継指名はウマイヤ朝末期まで続いたカリフ制度の慣例を塗り替える契機となった。

第2章は、第1章においても言及したメディナの総督について論じたものである。上述したように、メディナ総督人事においてカリフの親族の重用傾向が確認できるが、メディナの事例は、親族の中でもカリフの姻戚の登用が目立つという点で、その他の事例と一線を画している。メディナにおけるカリフの親族の重用傾向は、前後の時代、ウマイヤ朝の前期から少なくともアッバース朝の前期まで、継続して確認することができる。こうした人事が繰り返し行われた要因としては、一方ではメディナの聖性ゆえに、一方ではメディナが王朝へ与える脅威の少なさゆえに、この地の総督職がカリフの親族のための名誉職とされた、という推測が成り立つ。メディナやヒジャーズ地方は度々内乱、反乱の舞台となったものの、その人口の少なさゆえに、この地域の軍事力のみでは王朝の脅威とならなかった。

一方で、ムスリムの年中行事である巡礼の指揮官について注目してみると、巡礼の指揮官が正統カリフ時代以来、原則的には、メディナの統治者（カリフまたは総督）の任務であったことが判明する。ウマイヤ朝後期において、メディナ総督以外が巡礼の指揮官を務めた例外的事例では、シリアから来たカリフやその王子がその役割を務めている。巡礼は、理念的には全ムスリムに対して、支配者が誰であるかを知らしめるデモンストレーションの場であり、カリフやその親族が指揮官を務め、時には軍隊が巡礼に参列した。しかし通常の事例では、巡礼の指揮官を務めるのはメディナ総督であったため、その役割を担うことを前提として、カリフの親族がメディナ総督に重用されたという側面もあろう。

第3章は、エジプトにおいて見られる特殊な統治体制について論じたものである。ウマイヤ朝時代の地方総督は多くの場合、自らが担当する地方の全権を掌握していた。しかしながら、エジプトにおいては、総督の職掌が分割され、「礼拝を担う総督」と「租税を担う総督」がそれぞれ任命される体制が、王朝が滅亡するまでの約35年間継続している。この体制が導入される以前のエジプトは、西方征服の拠点であった。第2次内乱平定後にイフリーキヤ（チュニジア）方面への征服が再開され、征服活動は順調に進展していき、エジプトは前線基地としての役割を失っていった。

スライマーンの治世に、「礼拝を担う総督」と「租税を担う総督」がそれぞれ任命される体制が導入されると、徴税業務を強化するために「租税を担う総督」職には、シリアからマワーリーが派遣された。「礼拝を担う総督」については、カリフは積極的な関与をせず、しばしばエジプトで行われた人選を認めて、わざわざシリアから総督を派遣するという事は少なかった。エジプトは王朝末期まで比較的平和が維持された地方であったため、総督としての全権を与えて、総督に求心力をもたせる必要が生まれず、この体制が王朝の滅亡の間際まで継続された。

以上の3章にわたる、カリフの人事や親族との関係を中心に扱ったプロソポグラフィ

研究により、今まで描かれてこなかった、ウマイヤ朝後期のカリフの政策のいくつかの側面を明らかにすることができた。ビザンツとの国境地帯の総督やビザンツ遠征の司令官には、カリフ位を争うことのない、純血のアラブではない王子が、カリフの身近な軍事力の担い手として重用された。一方で、カリフ位を争う可能性がある純血のアラブの王子は軍事力や軍事経験から遠ざけられ、カリフの権力の維持が図られた。しかし、王朝末期にカリフの後継者指名が、軍事力を有する純血のアラブではない王子にカリフ位への道を開き、内乱の勃発を招いてウマイヤ朝の滅亡の一因となった。この時に生まれたカリフ位の資格に関する新たな慣例は、アッバース朝に引き継がれることとなる。他方、ウマイヤ朝後期のカリフは巡礼行事を王朝の支配を知らしめるデモンストレーションの場として重視し、自身や王子に軍隊を伴わせて巡礼の指揮を執り行った。多くの場合には、メディナ総督が巡礼の指揮を担ったために、名誉職の意味ももつこの地の総督にカリフの親族を登用して、彼らに巡礼の指揮を委ねた。軍事的な意義を失ったエジプトでは、カリフは総督から徴税に関する職掌を奪い取り、マワーリーを送りこんで徴税業務を強化した。以上、ウマイヤ朝後期におけるカリフの集権を志向する政策、イデオロギー面での特徴、カリフ制に関する新展開が、本論文の議論によって新たに解明された。

(論文審査の結果の要旨)

西暦7世紀前半に始まるイスラームの歴史的な発展にとって、ウマイヤ朝の時代は重要な意味を持つ時代である。現在「イスラーム的」と形容される政治、社会、文化、司法制度などの原型の多くがアッバース朝時代(750-1258)に淵源をもつものに対して、ウマイヤ朝の時代(661-750)はその前提をなし、アッバース朝体制によってそれがより「イスラーム的」とされる内容をもつものへと変形されていった、アラブ・ムスリム優位の一時代と捉えられることの多い時代である。この時代を歴史的に研究する上で逢着する史料上の大きな制約は、この時代に書かれた文書などの信頼を置くに足る同時代資料がほとんど残されておらず、結果としてこの時代を研究対象とする研究者は、いわゆる「アッバース朝革命」によって政治的にウマイヤ朝を打倒し、ウマイヤ朝の政治体制を根底的に改革して、より「イスラーム的」な政治体制を打ち立てたとする、後代のアッバース朝時代の年代記史料などを基に歴史を研究しなければならないのである。

本論文の著者である横内吾郎氏は、まず「序」において Julius Wellhausen に始まるこれまでのウマイヤ朝研究史を概観したのち、3章からなる本文においてウマイヤ朝時代に関する基本史料であるタバリーの年代記『預言者たちと諸王の歴史』をはじめ、ハリーファ・ブン・ハイヤートの『歴史』、バラズリーの『諸国征服史』及び『貴顕たちの系譜』などを基に、プロソポグラフィ研究を利用して、ウマイヤ朝時代の政権内人事の実態を解明することにより、ウマイヤ朝の最高権力者 カリフの権力構造の特徴を分析し、その内実を解明しようとした。プロソポグラフィ研究とは、論者横内氏によれば、1980年に刊行された Patricia Crone の著作の中で有効に利用された手法で、「個人の経歴を調査して、ある集団の相互関係や行動を解明する」手法のことである。横内氏によれば、「ムスリムの史料に表れる総督などの人名は、その他の同時代史料によって概ね裏付けを得ることができ、経歴(職歴や婚姻関係など)に関する情報については高い信頼が置けるため、プロソポグラフィ研究がムスリムの史料の有効な活用法となる。」また、本論文の表題となっている「ウマイヤ朝後期」とは、第二次内乱期(683-692)に即位したマルワーン1世から王朝の滅亡までを指す。

具体的に本論文では、上述したプロソポグラフィ研究により、第1章では「ワリー・アルアブド」(皇太子)の選任、第2章ではメディナ総督とメッカ巡礼の指揮者の人事、第3章ではエジプトの総督人事に関する問題が扱われている。これらの問題を考察するために、第1章では10頁分の、第2章については11頁分、第3章では2頁分の人名表が付けられており、これらはいずれもプロソポグラフィ的手法によって地方総督などの人名を網羅的に洗い出した綿密で丹念な労作である。史料中に現れるアラブの人名は社会的・伝統的に重んじられてきたナサブ(系譜)を伴い、「何某の息子(娘)」という表現が蜿蜒と記述されている場合とそれらが簡略化されて伝えられている場合があり、同一人物かどうかを判定するためには、前後の文脈や扱われる諸事件の前後関

係を的確に捉える必要がある。横内氏の論文では、こうした微細で地道な解読作業を経て、ウマイヤ朝政権において重要な政治的機能を有していたワリー・アルアフドや聖地であるメディナの総督、及び北アフリカ支配において枢要な意味をもつエジプト総督に就いた人物像と彼らを任命したカリフたちの政策傾向が明らかにされている。

第1章で主として扱われるワリー・アルアフドの人事では、全体の傾向として従来シリアを本拠としていなかったマルワーン1世の即位により、王朝の基盤を強化するためにウマイヤ家一門の一族や姻戚が重用されたこと、母親の出自によって非アラブ（ウンム・ワラド）の母親をもつ王子たちはワリー・アルアフドに就けられることがなく、遠征軍の指揮など軍事的な職務に任じられたこと、その後ワリード2世の時代(743-4)に至ってウンム・ワラドを母とする人物がワリー・アルアフドに任命されるに及んでウマイヤ朝のカリフ権は大きな変容を来し、以後王朝の末期まで政治的な混乱(第3次内乱)が続くことになる、と結論付けられている。

第2章では、ウマイヤ朝に先行する正統カリフ時代、ウマイヤ朝の前期(第2次内乱期まで)やウマイヤ朝後期に後続するアッバース朝初期の人事例も視野に含めて扱われたメディナ総督、及び巡礼の指揮者の人選に見られる傾向は、カリフの一族や外戚の重用ということであり、それはイスラームの聖地であるメディナの地理的な重要性と軍事的な意味におけるその重要性の低さに由来し、ウマイヤ朝後期の歴代カリフたちは、ムスリム全体にとって最大の年中行事である大巡礼(ハッジ)に自らが参加、もしくはその近親であるメディナ総督を参加させることにより、自らの信心深さやムスリム大衆に対する支配者としての威厳を印象付けたに違いないと結論する。

第3章で取り上げられたエジプトの総督人事については、マルワーン1世の息子で、ワリー・アルアフドでもあったアブド・アルアズィーズの死後、714-750年まではほぼ一貫してエジプト総督の職掌が礼拝(軍事)と徴税に分割され、ここでは前2章で見られたようなカリフの一族や姻戚の任命例は見られず、徴税の職務にはカリフのマワーリー(庇護民)が任用されて他の地方には見られない、地方総督の権力が抑制されていく状況(集権化へのカリフ側の意欲)が継続的かつ明確に窺える、という。

全体の結論部では、本論文の全体を通してウマイヤ朝後期のカリフたちは人事の面で自らの権力の維持、拡大を意図した方策を取り続けており、世俗的、宗教的に「神の預言者の代理人」(カリフ=ハリーファ)として国家とムスリム共同体の頂点にあるという理念を強く意識した存在であったことを提示している。横内氏の用いたプロソポグラフィ研究に基づく、この結論は概ね妥当なものであり、従来のアラブの特権が強調される世俗国家という通説に修正を求めるものであるといえる。ウマイヤ朝時代の研究には利用しうる史料の面で多くの制約、不便が見られる中で、それを研究手法の面から克服するべく、網羅的で、丹念な作業を通じて客観的な傾向を抽出し、立論していった過程は十分に評価できる。しかし、綿密に作成されたはずの人名表にいくつかの錯誤や分析の不充分さが見られること、先行研究の消化や評価が必ずしも適当

でないこと、分析の素材となった諸史料の記述内容に関する歴史的洞察が見られないことなどの欠点を指摘することができ、これらの点における改善が求められる。結論部において、横内氏はカリフの婚姻関係などを含む、より広範なウマイヤ朝後期カリフ政権内部の研究の展望を表明しており、将来的に本論文の内容の欠を補うに足る研究成果が発表されることに期待がもてる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年2月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。